

「ロータリーは思想である」

「ロータリーの森を歩く」の冒頭こんな事が書いてあります。

「ロータリーは思想である」

ロータリーといえば一般的には奉仕団体と考える人が多いと思いますが、ロータリーは本来社交クラブです。社交クラブというのに入るも自由、出るも自由で極めて団結性の弱い物です。然しロータリーは少し違っておりました。ロータリー運動が今日の発展を遂げるに至った原動力として考えられることは、優秀な会員による「ロータリー哲学」の探求が行われている点を上げる事が出来ます。これは歴史上存在する他のクラブに見られない特徴ということが出来るでしょう、と。

ロータリークラブはポール・ハリスが当時資本主義社会の宿命に翻弄されて、同業者のために何時破滅させられるかもしれないという警戒心のために疑心暗鬼に陥って、心がぼろぼろになっている実業家の集団を救う方策の一つとして、一業一会員制を以て発足した相互扶助の親睦クラブでした。ところがドナルド・カーターを入会させようとした時、

「自分たちだけ定期的に集まって肩と肩とを寄せ合い、それで商売が繁盛するようになったというが、それでは取り残された人達はどうなってもいいというのか、そんなエゴイスチックなクラブには入るつもりはない」

という痛烈な批判を浴びた時、ポール・ハリスは我々は何のために定期的に集まったのか、と初心に帰ったのです。

もともとロータリーを発足させたのは、同業者が居れば同業者同士の確執があって本当に打ち解ける事が出来ないと悟って、異業種の人達だけで試験発足したのであるが、本当はシカゴ中の全職業人を救済したいというのが目的であった。

果たせるかな異業種の会員はお互いの疑心暗鬼もなく、肩と肩を寄せ合っているうちに、異業種の智慧が交換されて、それぞれの視野がひろがり、商売の見通しかできるようになって、それぞれの企業が繁栄するようになった。

だとすると、もともとの動機であるシカゴの全職業人にその功德を還元すべきではないか、と思いついたのてあります。そこで「我等少数の職業人の親睦のエネルギーをシカゴの町の改善につかおう」

と会則を追加しました。

更にフレデリック・シェルドンの入会によって、

「我等少数の職業人の親睦のエネルギーを 他の団体では果たすことの出来ないようなやりかたで 世の為人の為に流すのが我等社交クラブの第一の眼目である」

と宣言し、親睦のエネルギーを社会改良の為なら何にでも使っていこうという事になったのであります。

このようにロータリーは常にクラブの例会に出席することの意義を求め続け、親睦の意味を追求して行ったのであります。そしてその親睦の意義は自己改善を心に、互いに主伴となって、他者に学ぶ姿勢をもって、利己と利他との調和を求める謙虚な姿勢にあるとしたのであります。

(27.10.21)

Service,not self か above self. か

アーサー・フレデリック・シェルドンの入会を期に「我等少数の職業人の親睦のエネルギーを、他の団体では果たす事のできないようなやり方で、世の為、人の為に流すのが我等社交クラブの第一の眼目である」と宣言したロータリーでは奉仕に対する関心がたかまり、ミネヤポリスロータリークラブの初代会長フランク・ビー・コリンズは第二回全米ロータリー連合会のポートランド大会の末尾に演壇に立ち

「ロータリークラブ組織の中においてなすべき事が一つある。それは直ちに行動を起こすことである。自己のためにロータリーに入会した者は間違った会員である。ロータリーは自己の為ではない。ミネヤポリスロータリークラブが採択し、そして創立以来一貫して取ってきた原則は Service,not self.『奉仕だ、私利私欲ではない』ということである」と述べて、大会の決議を受けて標語に採択されました。

中世神学の立場からすると Service は必然的に神への自己滅却ですから、not self でなければなりません。ロータリーは宗教ではなく、良質な職業人が自己研鑽を遂げて、利己と利他とを調和させる人生の哲学なんです。

様々の理論が戦わされまして、最後にシェルドンが、Service above self. と決着をつけ1923年以來 Service above self. と唱えられましたが、わが国では是を「超我の奉仕」と訳して、Service,not self. と Service above self. が同じようならえられかたをしているようです。

米山さんのロータリーライフは正しく超我 not self の奉仕だったと思います。

奉仕という点から考えれば not self でしょうが、自己を生かし、自己を磨いて、その余慶の功德が奉仕となる、即ち親睦のエネルギーが奉仕のエネルギーとなるというロータリー本来のあり方から考えれば、above self がよりロータリー的といえるのではないのでしょうか。

自己滅却ではなく、自己を生かせ、自分を大事にしよう、自分に奉仕せよ、つまり自分を磨けということが、Service above self. の心ではないかと思うのです。

釈迦は臨終の時、弟子や信者の人たちが、「お釈迦様が亡くなられたら、これから私たちは誰を頼りにしたらいいのでしょうか、と嘆き悲しんだ時、お釈迦様は「自分を頼りとしなさい。法を頼りとしなさい」と諭されたといひます。『自分を頼め』ということです。しかし、その自分というのは「行為において善き行為をなし、言葉において善き言葉を語り、又その心において善き思いを抱く人」のことであります。

つまり、釈迦の教えをいただいて、常に自己研鑽につとめている人としての「自分」ということであります。

そう考えてくれば、Service above self. は小堀先生の訳のように、「自己研鑽の奉仕」ということになりましょう。

自己研鑽を積んで利己と利他との調和の人格を作ることが、奉仕のエネルギーを生むものにもなるのだということです。

(27.10.28)

ポール・ハリスの反省

シカゴクラブは子クラブを 15 に増やしたが、子クラブを作る毎にクラブに色々な波紋が起こって親睦が阻害される事態になった為に、チェスレー・ペリーはロータリー哲学の追及とロータリーの拡大、そして各クラブの独立を尊重しながら協力関係を作っていくための情報の媒介機能、この 3 つを各クラブからあずかり、それだけを行使する事業団体を作り、これが全米ロータリー連合会です。

幹事にはチェスレー・ペリーが決まり、会長には紆余曲折の後ポール・ハリスが就任しました。1911 年でした。

然し、1912 年になりますとポールは疲れを感じるようになり、大会も欠席しましたが、彼の会長辞任の要請にもかかわらず、大会は彼を終身名誉会長に推挙するのでした。

それこれして 1922 年はロータリーを大きく変えた画期的な年となりました。

ロスアンゼルス大会において「国際ロータリー」と名称が変更され、全世界共通の標準クラブ定款、推奨クラブ細則が採択され、クラブ例会は毎週開く事を義務付ける事になりました。こうして、これ以後創立される全てのロータリークラブはその定款細則を採用しなければならなくなったのであります。

こうしてポール・ハリスは 1947 年（昭和 22 年）1 月 27 日に 79 歳で逝去しました。思えばいろんなことがありました。

当初考えたのは、親睦のために肩と肩とを寄せ合って親類付き合いをすることだとして、会員相互の原価取引を義務付けました。原始ロータリーの原則の第一は「You scratch my back」でして。第 2 は皆が自分の商売についてよく相談し、全職種にわたって智慧を交換したことでした。そのために皆の視野が広がり、思索が深くなり。商売の見通しできるようになり、貧乏人ばかりだった職業人が 5 年間に裕福になりました。

そんなロータリーに警鐘を鳴らしたのは特許出願の代理をする弁理士のドナルド・カーターでした。

「自分たちだけ肩と方とを寄せ合って、それで商売が繁盛したというが、では、そうでなかった人達はどうでもいいというのか、そんなエゴイスチックなクラブには入ることはできない」という痛烈なカーターの批判をうけたのです。ロータリークラブが順調に発展したことでポールは少しいい気になっていたのではなかったかといおもわれますが、この一喝でロータリークラブを発足させた原点に立ち返ったのです。

本来はシカゴの全職業人を救済したいと思ったのだが、親睦を旨とした為に全職業人からすると一握りの人に過ぎなかったが、一業一会員制で試験発車したのだ。それがうまくいって皆が事業に成功し、幸せになったとしたら、その功德はシカゴの職業人、即ちシカゴの市民に還元すべきではないか、と考へて

“われら職業人の親睦のエネルギーをシカゴの町の改善に使おうではないか”
ということ

「一業一会員制を以て選ばれた我等少数の職業人の親睦のエネルギーを世のため人の為に…」と、始めて對社会的な自覚がロータリーに導入される事になったのであります。

(27.11.11)

「利己と利他との調和」

ポールが親睦のエネルギーを「世の為人の為」にといったのに対してシェルドンは更に一言加えて

「我等少数の職業人の親睦のエネルギーを 他の団体では果たすことの出来ないようなやり方で・・・」

と補足しましたが、そのやり方というのは、会員選考に職業分類学の原則を適用した良質な会員のエネルギーによる、ということではないでしょうか。

どう言う事かというと、今までは先着順でした。だから損害保険の代理店からチャールズ・A・ニュートンを取る事にしたら、彼より他にモットいい人がいたとしても、もうその人を取る事はできませんでした。そうではなくて、その職種の中で一番良質な人を取る事にしました。

そして、このあらゆる職種から一番良質な人を取る事をロータリー運動の集団形成の基本原則としたのです。

良質な人と言っても、ロータリアンは無職の人はいません。皆私利私欲の追求に憂き身をやつしている人たちです。

しかし、私利私欲の追求と言っても社会的責任をまぬかれるわけではなく、やっていいことと悪い事があるとして、ポール・ハリスは物を売ってお金を頂戴するその根本に「利己と利他」との調和をおくべしとする理論を開発し、そしてその「利己と利他との調和」を図る精神世界を「サービス」と定義したのであります。

「利己と利他との調和」といえば、商人が材料を買って、加工賃をいくら使って、宣伝広告費が幾らかかって、アフターサービスの費用をいくらかかって、従業員の給料と自分の儲けを加算した上で、それを製品の数で割って、その品物の定価をつける、それ以外は一円でも多く頂くものではないから、利己と利他との調和をさせているんだと言う人がありますが、これは考えてみると、自分の必要なものはちゃんと取って、商売の名を借りて、後は貴方様のものですというのであって、利己を中心として利他といえないでしょうか。またあの人はこまっているようだから、そこを考えて原価を割るようなことがあっても大きく値引きしてやるんだとなると、これも利他を先にした利己となって、利己と利他との調和とはいえないでしょう。

利他というのは相手の身になって考えてあげることでしょう。相手におべんちゃらを言う事でもなく、歯に衣着せずにかが口を言う事でもありません。よくお医者さんがある人には励ましの言葉をかけるかと思うと、ある人には厳しく叱咤する、それは医学の原理によってやっているのだから、そのように自分の立場も原理にかない、患者も助かり、第三者が見ても納得できるやり方のことを利己と利他との調和というのではないのでしょうか。シェルドンはこの客観原理を「天地の理法」といいましたが、

有名な近江商人の商法の理念「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの商法が「利己と利他との調和」にあたるのではないのでしょうか。(27.11.18)

ロータリー即 [寛容]

利己と利他とを調和させる客観原則のことをシェルドンは「天地の理法」と呼びましたが、ポール・ハリスはその「天地の理法」の適用をはかる精神世界のことを「サービス」とよんだのであります。

更に、利己と利他との調和を図る事にロータリーの存在意義があるとすれば、その調和を達成させるのは定例例会であり、親睦ではないか。

そして、その調和を達成させる精神世界を「サービス」とよぶならば親睦とサービスとは同次元の概念ではないか、

こうして、「ロータリーは親睦とサービスとの調和の中に宿る」という自覚を開陳するに至り、

親睦とサービスを同価値の概念として把握する「寛容」の中にロータリーは宿るとして、ロータリー即寛容と宣言するに至ったのであります。

寛容という言葉は1910年ポール・ハリスの論文 Rational Rotarianism の巻頭に出てきます。この論文は1908年自分が望んでなった会長職を辞任しなければならなかった時、辞任は自分の考えにどこかに間違いがあって、ロータリーを正しく踏まえていなかった為ではなかったかと反省し、ロータリーとは何であろうかと自問したその回答といえる論文で、合理的な物の考え方からして、ロータリーとは何であろうかということがテーマになっています。

論文はできたんですが、当時まだその発表の場がありませんでした。

時の全米ロータリー連合会の幹事チェスレイ・ペリーは連合したロータリークラブへの情報活動を考えていた時で、非常に喜び、その論文を巻頭論文として雑誌を出す事にしたのであります。

こうして1911年1月25日発刊されたのが The National Rotarian であり、その巻頭を飾ったのがこの論文でした。

「神の思し召しにより、自分が何処かのコロシアムの一段高い所に上ることがゆるされ、お前はロータリーの始祖として、ロータリーとは何であるか一言で言えと問われたら、一瞬のためらいもなく Toleration(寛容)と答えるであろう」

という宣言でした。

これはロータリーは親睦と奉仕を同価値の概念として把握する調和の取れた普遍的な哲学であるとして、その調和を取り持つのが Toleration(寛容)だと宣言したのであります。

ロータリー即寛容ということを出した時にロータリーの奉仕哲学の土俵ができたと言う事で、これがロータリーの原点であります。

この理念を確立する事によってポールはロータリーの聖者となったのです。

爾後ポールはロータリーの本質は寛容の中にあると説いて全世界のロータリアンの色々な意見の対立に処してロータリーをリードし、更に思想としてのロータリーと千差万別の哲学思想とを調和させてロータリー運動を支えたのであります。

(27.11.25)

商行為は世の為人の為

ポールの言う「寛容」 Toleration は普通によく使われる "寛容の精神でおゆるしてください・・・" というような意味での寛容ではなく、佛教で大事な徳目とされる中道の心が一番当たっているのではないかと考えております。即ちあらゆる矛盾対立を超える自由な立場の実践の世界の消息が中道であり、「寛容」の心ではなかったかと思うのであります。

これを要するに、利己と利他との調和というのは実践の世界のことなんです。

ロータリアンは例会に相集い、自分の世界では考えられない他のロータリアンの考え方に学ぶのです。つまり自分の心の中に他の職業人の姿をうつし、自分の足りない所を補っていくのです。だから自分の事だけでなく、他人との係わり合いを大事に考えるのです。

ですから、自分も他の人に学んでもらうものを持つべく研鑽を励むことを忘れてはならないということです。互いに補い合う機能を持っていなければならないと言う哲学を持っている人たちのつどい、つまり常に他人にお節介をやく人達の集まりがロータリークラブなのです。

こうしてロータリアンは業界の他の職業人よりも多少遠いところがよく見える、そういう人たちが地域社会のありとあらゆる職業情報を例会に持ってきて、お互いの考え方を交換するんですから、更にずっと遠い所が見えることになるのです。

ロータリーは私的利潤追求を目的とする良質な職業人の私的利潤追求の過程のなかで、その思考過程そのものを世の為人の為の原理的基盤としようとするものではないでしょうか。

利己と利他との調和を念頭に置いて、利潤の追求を進めていくわけですから、自分が幸せになるということは、即ち世の為人の為なる考え方に繋がる事になるわけです。

職業人として私的利潤を追求して、それが同時に世の為人の為になるかという問題を解決できるのはロータリー哲学だけではないでしょうか。

前の例会の帰りのエレベーターの中で嶋原君から、お年玉というのは佛教と関係はないんですか、と質問を受けました。よく調べてみると約束しましたので、しらべてみましたが、仏教とは直接関係はないようです。わが国の伝統的な神道の行事の名残りで、新しい年のはじめに、新年を言祝いで神様にお供えしたもののオウツリのことをお年玉と呼び習わしたことはじまるようです

オウツリが神に供えたものの一部を、供えた人たちへ分かち意味のものとすれば正月の贈物に対するオウツリがお年玉とよばれたのは理解できます。

こんにちお年玉を贈るにも仏様のお供えのおすそわけというような心をこめたいものです。

職業人の倫理的取引の最初の契機がカルビンの提唱で神の名における取引をせよだったことを思うと、その取引行為の中に、売り手は買い手にどうぞ大事にしてと、買い手は売り手に有難うと互いに手を合わせる心がほしいと思います。

(27.12.2)